

論文審査の要旨及び担当者

報告番号	甲 ㊦ 第	号	氏 名	岩 田 樹 里
論文審査担当者 主 査 内 科 学 家 田 真 樹 救急医学 佐々木 淳 一 麻酔学 山 田 高 成 放射線医学 陣 崎 雅 弘 学力確認担当者：金井 隆典 審査委員長：佐々木 淳一 試問日：2024年12月27日				
(論 文 審 査 の 要 旨)				
論文題名：Long-Term Impact of Gender Differences After Transcatheter Aortic Valve Implantation (経カテーテル的大動脈弁留置術後に性差が及ぼす長期的な影響に関する研究)				
経カテーテル的大動脈弁留置術（TAVI）の適応は拡大される傾向だが、性別に基づくTAVI後の長期予後の違いについては不明である。本研究では、慶應義塾大学病院でTAVIを行った患者の長期的観察データに基づき、TAVI後の性差が予後と構造的弁劣化（SVD）に及ぼす影響を調査することを目的とした。 審査では、大動脈弁狭窄症の自然予後とTAVI施行後の予後の相違を問われた。大動脈弁狭窄症は心不全発症後の平均余命が約1年という報告があり、TAVIを施行した場合と比較して予後が著しく不良であると回答された。他の臨床研究に参加した患者が除外されたことの影響について問われた。本研究で除外した患者は、現在本邦で使用されていない人工弁の植え込みであったり、透析患者の治験であったりするため、本研究の結論には粗大な影響はないと回答された。長期的に女性は出血性イベントが多いという結果であるが、出血部位や高出血リスクに該当する内容について問われた。本研究では、統計学的な検討は行っていないが、多くは消化管出血であり、体格が小さく高齢である日本人女性のTAVIコホートに対しては、抗血栓薬の導入の是非について慎重に検討すべきであると回答された。将来的には抗血栓薬の導入をするべき症例の決定的要因や使用薬剤の研究課題が提案された。冠動脈疾患の虚血評価の施行有無について問われた。本研究では、血管造影上の狭窄で冠動脈疾患の有無を判定したが、大動脈弁狭窄症存在下での冠動脈虚血評価はアイソトープなどのモダリティでは正確な虚血判定は困難であるとされており、今後の検討課題であると回答された。本研究では透析患者を対象としているかについて問われた。本研究は本邦で透析患者に対するTAVIが導入される以前の患者を対象としたため、透析患者は除外されており、透析患者のTAVI後の性差の影響については今後の研究課題であると回答された。バルーン拡張型弁が女性においてSVDを発症する要因となることに対し、女性患者へのバルーン拡張型弁使用の是非について問われた。本研究では、バルーン拡張型弁が女性のSVD発症の一因である可能性が示されたが、SVDの発症率については性差はなく、バルーン拡張型弁が予後増悪因子にはなり得ない可能性が高いと回答された。弁周囲逆流が予後規定因子になるか問われた。本研究では、男女ともに軽度以上の弁周囲逆流は予後やSVD発症の因子にはならないという結論であるが、弁周囲逆流が予後増悪因子であるという論文も発表されており、将来的にはより多くの対象患者かつより長期の観察期間で研究を遂行すべきであると回答された。 以上、透析患者を含め対象患者を増やし、より長期の観察期間を設ける必要があり、血栓弁に対する抗血栓薬の是非についての検討課題を残すものの、過去になく長期的なTAVI後の性差の予後とSVDの検討を行った本研究は、今後の臨床に応用される結果をもたらす有意義な研究であると評価された。				